

淡黄色花タンポポの分類

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00050042

芹沢俊介：淡黄色花タンポポの分類

〒448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢1 愛知教育大学自然科学系生物領域

Shunsuke Serizawa : Classification and nomenclature of the pale-yellow-flowered dandelions in Japan

Department of Biology, Aichi Kyoiku University, Igaya-cho, Kariya 448-8542, Japan

Abstract

The Japanese pale-yellow-flowered dandelions, *Taraxacum denudatum*, *T. hideoi*, *T. nambuense* and *T. albidum* var. *igaense*, are morphologically not distinct from one another. They are referred to a single species, *T. denudatum*. The lemon-yellow-flowered dandelions, *T. arakii* and *T. ceratolepis*, are regarded to be a variety of *T. denudatum*.

Key words : Asteraceae, dandelion, *Taraxacum*, *Taraxacum arakii*, *Taraxacum denudatum*.

はじめに

タンポポ属 *Taraxacum* は識別形質が少なく、しかも種内地域集団間や集団内個体間の形態的変異が大きく、分類の難しい植物群である。日本産タンポポ属植物は、北村他 (1957) や北村 (1981) により 22 種に、Morita (1995) により 15 種に分類されているが、実際に野外で観察していると、どちらの分類系とも矛盾する集団に出会うことがある。

芹沢 (1986) は、愛知県知多半島南部にキビシロタンポポ *T. hideoi* Nakai ex H. Koidz. と同定される淡黄色花タンポポが分布すること、その総苞外片先端の小角突起は大小さまざまであること、同所に他の点ではこの淡黄色花タンポポと区別できないが、花弁が黄色(ただし、ニホンタンポポ *T. platycarpum* Dahlst. s. lat. の黄色とはやや異なり、レモン色に近い) のタンポポがあることを報告した。そして愛知県版レッドデータブック (愛知県環境部自然環境課 2001) では、黄花品をヤマザトタンポポ *T. arakii* Kitam. にあて、キビシロタンポポはその一型であるとした。ヤマザトタンポポとキビシロタンポポが種の階級では同一であるという見解は、北村他 (1957) や北村 (1981) とともに Morita (1995) と異なるので、ここでその根拠を説明するとともに、その後の野外観察の結果を加えて、淡黄色花タンポポとその黄花品の分類と学名について検討する。

本文中で引用した標本は直前の記述の裏付けとなるもので、すべて愛知教育大学標本室 (AICH) に保管されている。

I 日本産淡黄色花タンポポの異同

黄花のタンポポ類が本州や北海道に広く分布し、白花のシロバナタンポポも西南日本に広く分布しているのに対し、淡黄色花のタンポポがまとまって生育している場所はかなり不連続的である。生育地の一つは岡山県の高梁市から新見市にかけてで、このものにはキビシロタンポポ (基準標本産地は岡山県新見) という名が与えられている。キビシロタンポポの原記載 (Koidzumi 1933b) は比較的短い、シロバナタンポポ *T. albidum* Dahlst. と比較して、花がやや黄色を帯びること、開花時に花茎が短いこと、総苞外片は開出せず、幅広く、辺毛が多く、先端にしばしば小角突起がないこと、そう果は黒褐色であることなどが書かれており、この種の特徴をよく示したものである。キビシロタンポポは、中国地方のほか九州北部にも分布しているという (Morita 1995)。

近畿地方では、三重県の伊賀地方から津、四日市周辺にかけて淡黄色花のタンポポが点々と生育しており、イガウスギタンポポ *T. albidum* var. *igaense* H. Koidz. (基準標本産地は伊賀市三田および上津)

という名が与えられている。分布域の東側は、伊勢湾対岸の愛知県知多半島南部に達している。三重県を除く近畿地方では、私は淡黄色花のタンポポを見たことがない。もし生育していたとしても、多いものではないと思われる。

知多半島を除く中部地方や関東地方中南部でも、ニホンタンポポまたはエゾタンポポの群落中に稀に見られる淡色花の個体を別にすれば、私は淡黄色花タンポポが分布している場所を知らない。しかし、東北地方の福島県から岩手県にかけては淡黄色花タンポポがまとまって生育しており、ここのものにはオクウスギタンポポ *T. denudatum* H. Koidz. (基準標本産地は福島県中村)、ナンブシロタンポポ *T. nambuense* H. Koidz. (基準標本産地は岩手県盛岡) などの名が与えられている。

これらのうちイガウスギタンポポは、すでに芹沢(1986)が報告したように、形態的にキビシロタンポポと区別できない。オクウスギタンポポとナンブシロタンポポは、前者はシロバナタンポポと比較して葉が小さく、頂裂片が菱形、そう果は淡褐色～藁色、後者はシロバナタンポポと比較して葉が大きく、頂裂片が三角形、そう果は黒褐色～褐色などの特徴で区別されたものであるが、葉形の差は個体変異にすぎない。そう果の色も、「黒褐色になることがある」というのは「黒褐色になることはない」ニホンタンポポなどと異なる特徴であるが、色の濃さについては東北地方ではかなり集団間、あるいは集団内個体間の変異が大きい。淡褐色～藁色は少し淡色すぎる表現と思われるが、いずれにしても個々の集団、あるいは個体のそう果の色自体は、明確な識別形質にならない。命名者自身、後にオクウスギタンポポとナンブシロタンポポを種の階級では同一とみなしており(Koidzumi 1936)、Kitamura (1957) や Morita (1995) も両者を区別していない。野外で観察しても、東北地方に2種の淡黄色花タンポポが存在するようには見えない。

キビシロタンポポとオクウスギタンポポの関係については、Kitamura (1957) は前者をシロバナタンポポの異名として扱い、後者を後述するウスギタンポポ *T. shinanoense* H. Koidz. の異名として扱い、結果的に両者を別の種とみなした。しかしキビシロタンポポは、原記載に示されているような特徴で、シロバナタンポポからはっきり区別できる。Kitamura (1957) の扱いは、キビシロタンポポの実体を誤認したことに起因すると思われる。また Morita (1995) は、キビシロタンポポは総苞外片が楕円形でそう果が黒色～暗褐色、オクウスギタンポポは総苞外片が卵形でそう果が褐色であるとして、両者を種の階級で区別した。しかしキビシロタンポ

ポの総苞外片は、小角突起が大きい個体では確かに楕円形に近くなることもあるが、ほとんどの個体では卵形である。楕円形に近くなる場合でも、上部に比べれば下部の方が幅広く、先端部は多少なりとも尖るから、厳密に言えば楕円形ではない。また、オクウスギタンポポのそう果は、前述したように必ずしも褐色ではない。Morita (1995) がオクウスギタンポポに含めたナンブシロタンポポは、“*achines nigrescentia*” を特徴の一つとして記載されている。要するに総苞外片の形やそう果の色は、キビシロタンポポとオクウスギタンポポを分ける区別点にならない。他に両者を分けるはっきりした特徴も見あたらない。従って、キビシロタンポポ、イガウスギタンポポ、オクウスギタンポポ、ナンブシロタンポポを外部形態で区別することは困難である。中国地方の集団、三重県の集団、東北地方の集団が相互に地理的に隔離されていることは確かだが、外部形態で区別が困難なものをそれだけの理由で別分類群とみなすのは無理である。

なお、オクウスギタンポポと同じ論文(Koidzumi 1933 a) でそれより5ページ先に記載されたウスギタンポポ *T. shinanense* H. Koidz. (基準標本産地は長野県聖山) も、淡黄色の頭花が特徴とされたタンポポである。後に Koidzumi (1936) は、両者を種の階級では同一と考えた。また Kitamura (1957)、北村ほか (1957)、北村 (1981) はオクウスギタンポポをウスギタンポポと同一の、他から種の階級で区別できる分類群であるとみなし、前者を後者の異名とした。一方森田 (1980)、Morita (1995) は、ウスギタンポポをエゾタンポポの淡色花品と見なした。もしウスギタンポポが他から種の階級で区別できるような独立性の高い分類群ならば、淡黄色花の個体は自生地においてまとまった集団として存在していることが期待される。逆にウスギタンポポが単なるエゾタンポポの一型ならば、淡黄色花の個体はエゾタンポポの集団中に稀に点在しているはずである。そこで私は聖山高原一帯を2回、それぞれ丸1日かけて探索してみたが、確認できたのは黄花のエゾタンポポだけで、淡黄色花のタンポポは発見できなかった。従って、ウスギタンポポが種の階級で区別できる分類群である可能性は低く、エゾタンポポの一型である可能性が高いと判断される。ウスギタンポポの原記載には“*Squamae series exterioris apice obtusae vel subrotundato-obtusae, toto viridescentes sed apice et nervoque atro-purpuratae*” と書かれており、この点でもウスギタンポポはキビシロタンポポやオクウスギタンポポ(総苞外片は先端が尖り、辺縁がしばしば紅色を帯びる)とは異なり、

エゾタンポポに近いものと考えられる。

II 近畿地方西北部および中国地方の山間部に分布する黄花タンポポの分類

キビシロタンポポは、岡山県の高梁市から新見市にかけての地域では比較的普通に見られる。そのうち高梁市（旧備中町）布瀬周辺では、花が淡黄色のものほかに、花が黄色であること以外の点ではキビシロタンポポから区別できない個体（芹沢 nos. 54512, 54514）が、それだけで小集団を作って、あるいは花が淡黄色のものと同様に混生して、点々と生育していた。この状況は、芹沢（1986）が知多半島南部で観察した状況と同様であった。

Kitamura（1957）は、高梁市を含む近畿地方西北部から中国地方の山間部に分布するカンサイタンポポ以外の在来黄花タンポポとして、クシバタンポポ *T. pectinatum* Kitam.（基準標本産地は岡山県新見市大野部）、ヤマザトタンポポ *T. arakii* Kitam.（基準標本産地は兵庫県東床尾山）、ケンサキタンポポ *T. ceratolepis* Kitam.（基準標本産地は京都府綾部市上杉）の3種を認めている。そこで、布瀬周辺に生育するキビシロタンポポ黄花品の種名を確定させるためには、これら3種との異同を検討する必要がある。

ところが厄介なことに、タンポポ類はきれいな標本を作りにくい植物である。外部形態に基づく分類で最も重要な手がかりとなる総苞外片の諸形質（開出の程度、先端の小角突起の大きさや形、先端部の立体的なふくらみ、内片に対する相対的な長さなど）は、乾燥標本ではつぶれたり、不均等に縮んだりしてわかりにくくなっていることが多い。花弁や総苞外片の色も、古い標本では失われてしまう。そのため基準標本を見ても、外部形態に関する有効な情報はほとんど得ることができない。むしろ、標本採集者が生品を観察した結果を含めて作成されていると思われる記載文のほうが、有効な手がかりとなる。また、タンポポ類は最初に述べたように集団内個体間の変異が大きく、1枚の標本では集団としての特性が把握できない。基準標本産地で自生集団を見て、基準標本の母集団の変異を把握しなければ、分類学的検討が進まない。そこで、上記3種の基準標本産地を訪れ、変異や他種との関係を観察した。

まず、ケンサキタンポポの基準標本産地である京都府綾部市上杉では、黄花の在来タンポポはほとんどが頭花の小さい、北村ほか（1957）、北村（1981）、Morita（1995）ではカンサイタンポポとされている広義の *T. platycarpum*（ニホンタンポポ）の1型であった。しかし、ニホンタンポポに該当しない植物も、林縁や里草地に稀に生育していた。それら

は、形態的に2つの型に区別できた。一つは、花弁がレモン色で、総苞外片は小角突起を除けば平面的で先端が尖り、辺縁が紅色を帯び、小角突起は小さく長さ1 mm以下（芹沢 no. 41614）からやや大きく長さ1.5–2 mm（芹沢 no. 41610）まで変異があるものであった。他の一つは、花弁がニホンタンポポと同じような黄色で、総苞外片はエゾタンポポのように先端部がこぶ状にふくらんで内側に曲がり、そのため先端があまり尖らず、辺縁は紅色を帯びず、はっきりした小角突起がないもの（芹沢 no. 41612）であった。ケンサキタンポポは、“*ceratolepis*”（角がある鱗片の）という種小名から示されるように、前者に含まれるものと判断された。前者のそう果は、黒褐色というほどではないが、後者に比べればやや暗色であった。そしてそう果の色がやや薄いという点を除けば、前者は形態的に高梁市のキビシロタンポポ黄花品とほぼ一致するものであった。なお上杉周辺では、シロバナタンポポは点々と生育していたが、淡黄色の花をつけるタンポポは見あたらなかった。

次に、ヤマザトタンポポの基準標本産地である兵庫県東床尾山は京都府との県境近くに位置し、山林の中ではタンポポ類を見ることができなかった。しかし、山間部にある豊岡市奥山、朝来市朝日などの集落周辺には、点々と黄花の在来タンポポが生育していた。ここでも綾部市上杉と同様、その中にキビシロタンポポ黄花品にほぼ一致するもの（芹沢 nos. 41620, 41637）とエゾタンポポに似た総苞外片を持つもの（芹沢 no. 41622）の2型が区別された。ヤマザトタンポポは、“*squamae exteriores apice plus minus caudatae margine praecipue superne rosascentes*”という記載文から、前者に含まれると判断された。ここではニホンタンポポは見あたらず、淡黄色の花をつけるタンポポも生育していなかった。

最後の、クシバタンポポの基準標本産地である岡山県大野部は、最近新見市に編入された地域で、新見市街の西方、広島県との県境近くに位置する。ここでも在来黄花タンポポの状況は上杉や東床尾山と同様で、キビシロタンポポ黄花品に似たもの（ただしこのものは小型の個体が多く、そのためか総苞外片の小角突起はすべて小さく、辺縁はほとんど紅色を帯びていなかった。図1上の左および下の左3頭花、芹沢 no. 79629）と、エゾタンポポに似た花色と総苞外片を持つもの（図1上の右および下の右3頭花、芹沢 no. 79628）の2型が区別された。前者は葉の切れ込みがさまざまであったのに対し、後者はどの個体も深く切れ込んだ葉を持っていた。クシバタンポポは、“*Folia profunde*



Fig. 1. *Taraxacum denudatum* var. *arakii* (left) and *T. pectinatum* (right). Upper: flowering heads, lower: involucre. Three involucre of respective taxa were collected from different individuals.

pectinato-pinnatifida, laciniis patentibus vel interdum leviter reflexis, squamae exteriores apice plerumque obtusae”という記載文から、後者に含まれる可能性が高いと判断された。ここでも、ニホンタンポポは生育していなかった。

近畿地方西北部や中国地方の山間部では、これら3カ所以外の場所でも、私が観察した限りでは上に述べた2型の両方、またはどちらか片方が生育していた。そして、このどちらにも該当せず、ニホンタンポポにも該当しない在来黄花タンポポは確認できなかった。このような観察結果から、近畿地方西北部および中国地方の山間部に分布する在来黄花タンポポ（ニホンタンポポを除く）は、ヤマザトタンポポ＝ケンサキタンポポ＝キビシロタンポポ黄花品と、クシバタンポポの2種からなると判断される。Morita (1995) は、この地域の黄花タンポポを、クシバタンポポ＝ヤマザトタンポポ（総苞外片は卵形で総苞の半分より短く、先端の小角突起はあって

もごく小さい）とケンサキタンポポ（総苞外片は楕円形～披針形で総苞の半分より僅かに長く、先端の小角突起は顕著）の2種にまとめた。しかし、キビシロタンポポの総苞外片先端の小角突起は芹沢(1986)が図示したように大小さまざまで、それに伴って総苞外片の縦横比や外片と内片の長さの比もある程度変化し、この点はキビシロタンポポ黄花品も同様であった。京都府綾部市のケンサキタンポポ基準標本産地でも、前述したように同様のことが観察された。従ってMorita (1995) が用いた形質は、ヤマザトタンポポをケンサキタンポポから区別しクシバタンポポと結びつける根拠にはならないと思われる。

Ⅲ 学名と和名

前述のように、キビシロタンポポ、イガウスギタンポポ、オクウスギタンポポ、ナンブシロタンポポは相互に形態的な区別が困難である。ヤマザトタンポポとケンサキタンポポも、花色以外の点では上記

4分類群と明確な違いはなく、種の階級で区別できるものではない。これらが種の階級で同一と考えるならば、その中で最も早く発表された学名はオクウスギタンポポの *T. denudatum* H.Koidz. である。そこで、種名としてはこれを用いるのが適切である。

キビシロタンポポ = イガウスギタンポポ = オクウスギタンポポ = ナンプシロタンポポとヤマザトタンポポ = ケンサキタンポポの差は基本的に花の色だけであるから、一般的な事例なら両者は品種の階級で区別される。しかし、この種が無融合生殖種であること、分布域のかかなりの部分で片方の型しかなく、ニホンタンポポやエゾタンポポの群落中に稀にみられる淡色花品に比べればはっきりした群であることを考慮すると、変種の階級で区別してもよいように思われる。ヤマザトタンポポとケンサキタンポポは同一論文で記載されたものなので、両者を合一する場合どちらの学名を用いてもよい。そこで、この植物の生育環境をよく示していると思われる「ヤマザトタンポポ」という和名に対応し、しかも1ページ先に記載された *T. arakii* の種小名を、変種名として採用する。三重県や愛知県知多半島で淡黄色花タンポポと混生している黄花品は、分布域が離れていることから、近畿地方北部や中国地方のヤマザトタンポポとは独立に生じた花色変異品である可能性が否定しきれない。しかし、形態的にはヤマザトタンポポから区別できないので、とりあえずヤマザトタンポポに含めておく。以上のことから、日本産淡黄色花タンポポおよびその黄花品の学名は、以下のように整理される。

Taraxacum denudatum H. Koidz., Bot. Mag. Tokyo **47**: 94 (Feb. 1933); Morita in Iwatsuki et al. (eds.), Fl. Jap. **IIIb**: 11 (1995). -*T. shinanense* H. Koidz. var. *denudatum* (H. Koidz.) H. Koidz., J. Jpn. Bot. **12**: 713 (1936).

Taraxacum hideoi Nakai ex H. Koidz., J. Jpn. Bot. **9**: 351 (Oct. 1933); Seriz., J. Phytogeogr. Tax. **34**: 58 (1986); Morita in Iwatsuki et al. (eds.), Fl. Jap. **IIIb**: 11 (1995).

Taraxacum nambuense H. Koidz., J. Jpn. Bot. **9**: 363 (Oct. 1933). -*T. shinanense* H. Koidz. var. *nambuense* (H. Koidz.) H. Koidz., J. Jpn. Bot. **12**: 713 (1936).

Taraxacum albidum Dahlst. var. *igaense* H. Koidz., J. Jpn. Bot. **12**: 629 (1936).

Taraxacum shinanense auct. non H. Koidz., Kitamura, Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto ser. B **24**: 20 (1957), excl. specim. ex Shinano.

Distr. Endemic to Japan (Honshu and Kyu-

shu).

var. **arakii** (Kitam.) Seriz., stat. nov.

Taraxacum arakii Kitam. Acta Phytotax. Geobot. **2**: 182 (1933), Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto ser. B **24**: 35 (1957); H. Koidz., J. Jpn. Bot. **12**: 820 (1936).

Taraxacum ceratolepis Kitam. Acta Phytotax. Geobot. **2**: 183 (1933), Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto ser. B **24**: 36 (1957); H. Koidz., J. Jpn. Bot. **12**: 820 (1936); Morita in Iwatsuki et al. (eds.), Fl. Jap. **IIIb**: 12 (1995).

Distr. Endemic to Japan (Honshu).

和名は、*T. denudatum* にはオクウスギタンポポが対応する。しかし、「ウスギ」に地域名を冠したオクウスギタンポポは、淡黄色花タンポポ全体の名称としては使いにくい。そこで、次に記載された *T. hideoi* の和名であるキビシロタンポポを、今回まとめた意味での *T. denudatum* に対する和名として用いることにしたい。こちら地域名を冠した名称であるが、比較の対象がシロバナタンポポなので違和感が少ないと思う。

なお、クシバタンポポは葉が深く切れ込むという特徴が安定しているが、総苞の形態はエゾタンポポに極めてよく似ている。両者が近縁であることは明らかである。この両者の関係については、改めて検討する必要がある。

引用文献

- 愛知県環境部自然環境課. 2001. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブックあいち植物編. 714 pp. 愛知県環境部自然環境課.
- Kitamura, S. 1957. Compositae Japonicae pars sexta. Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto ser. B **24**: 1-42.
- 北村四郎. 1981. キク科. 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫(編)日本の野生植物Ⅲ 草本・合弁花類, pp. 156-235. 平凡社, 東京.
- 北村四郎・村田源・堀勝. 1957. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅰ. 297 pp. 保育社, 大阪.
- Koidzumi, H. 1933 a. *Taraxacum novum* Orientali-Asiaticum I. Bot. Mag. Tokyo **47**: 89-124.
- Koidzumi, H. 1933 b. *Taraxacum novum* Japonicum (1). J. Jpn. Bot. **9**: 349-364.
- Koidzumi, H. 1936. *Taraxacum novum* Japonicum (5). J. Jpn. Bot. **12**: 712-720.

森田竜義. 1980. 日本産のタンポポ. 植物と自然 **14** (4) : 9-15.

Morita, T. 1995. *Taraxacum* Weber ex F.H.Wigg. in K. Iwatsuki, T. Yamazaki, D. E. Boufford and H. Ohba (eds.), *Flora of Japan III* **b** : 7-13. Kodansha, Tokyo.

芹沢俊介. 1986. 愛知県知多半島に生育する淡黄色花タンポポについて. 植物地理・分類研究 **34** : 55-59.

(Received October 17, 2005 ; accepted February 25, 2006)